

# 「ルーツ」のルーツをめぐる物語

——小島信夫「美濃」をよむ「前書」

## ○「ルーツ 前書」

小島信夫「美濃」（一九七七（昭和五二）年九月―一九八〇（昭和五五）年五月）は、(六)章以降全てが「美濃」というタイトルであり、その数字だけが連続性と順番を示している。その前章にあたる(一)章から(五)章までは「ルーツ 前書」という不思議なタイトルを付している。不思議なのは、タイトルのみではなく、(一)と(三)の間には、「モンマルトルの丘」という題の章が挟まれており、この章のみが初出が『文藝』である（他は全て『文体』）。「モンマルトルの丘」には数字を付せておらず、前章が(二)、続く章が(三)なので、この意味でも例外的な章となっている。

もちろん「前書」という意味も、(一)から(五)章までに主要な人物と出来事が出揃うことを考えれば、理解出来ないわけではない。さらに、それらが「美濃」本編に対して「ルーツ」という機能を果たすとともに、人々が「美濃」という故郷を「ルーツ」として考えている様相を描いているという理解も可能だ。だが、この章

題は、もう少し時代の問題と切り結ぶべき問題なのである。

非常に謎が多い問題作あるいは実験作と評される「美濃」であるが、これまでこの前半章のタイトルの意味が検討されることはなかった。また、違和感の様なものを感じながらも、「モンマルトルの丘」という章題の意味も意義も、その研究は手つかずのままである。本論は、そうした「美濃」を読む前段階の考察に過ぎないが、それが「美濃」全体の理解において欠かすことの出来ない問題でもある。

## 一「ルーツ 前書」のルーツ

「美濃」の連載が開始する三年前の一九七四（昭和四九）年にアメリカで、ある物語の序章の要約が『リーダーズ・ダイジェスト』七月号に掲載された。アーサー・ヘイリーの「ルーツ」という作品である。すぐに評判を呼んだこの物語は一九七六（昭和五一）年一〇月にダブルティ社より出版され全体像が明らかになる。建国二百年祭の回顧ムードに乗って、たちまち百万部を突破

正田雅昭

する売れ行きとなり、二二週にわたって週刊ベストセラーのトップを独走する。

翌年の一九七七（昭和五二）年には、ABC放送がTVの連続ドラマとして放映、最終放送日の視聴率は五一・八％を記録している。当時の人口から計算すると一億三千万人が八日間の放送の一部ないし全体を観たことになる。四月には、ニューヨーク全米優良図書委員会によって特別優良図書に選定されビュリツア賞を受賞。以後、複数の盗作疑惑裁判に巻き込まれながらも、「ルーツ」は大きなブームとなった。

このブームを予見していたかの様に、社会思想社社長の小森田は、単行本刊行まえに日本語版の刊行権利の獲得に動き、単行本刊行の二ヶ月後に日本語訳刊行に関する契約をまとめている。

社会思想社が『ルーツ』を安岡章太郎・松田銑の共訳で刊行されるのが報じられたのがアメリカでドラマが放送され評判を博した三月。社会思想社の宣伝もあり、これまでのアメリカでの様子が紹介され、新聞各紙では「ルーツ旋風」という言葉が散見されるようになる。

五月に、日本語版の刊行に先んじて、『プレイボーイ』誌上に小笠原豊樹訳で「ルーツ」の連載が開始され、同誌のこの時の刊行部数は過去最高を記録したことなどからも、当時の日本での反響の大きさが伺われるだろう。しかし、現在の地点から新聞各紙の「ルーツ」という言葉を検索してみるとある傾向に気がつく。

一つは、これより前に「ルーツ」という語の使用はほばみられないことである。もちろん、既に字書などに「root」の意味で記載されている一般的なカタカナ語ではあった。しかし、以後二

年間あまりの期間に集中して現れる「ルーツ」という語は限定された意味を担っていたのだ。

このところ、東京都内の各本屋さんは「ルーツ」ブームに目を白黒させている。「日本でも翻訳がとくに出版されているものと勘違いされて、お客さんが連日、二、三十人いらっしやいます。まだ出ていないとお答えすると、実に意外だという顔をされますよ」と紀伊國屋書店（東京・新宿）の店員。

『読売新聞』朝刊 一九七七（昭和五二）年三月二五日  
当然ながら、最も多いのは「ルーツ」という書籍そのもののブームに関する報道である。このブームは、「ルーツ」裁判の様相とともに、日本でも「ルーツ」論争という形でスキャンダラスな形で報道されることも多かったが、それらは、日本でも『ルーツ』そのものの価値を落とすことにはならなかった。

九月に社会思想社より「ルーツ」が上下巻の形で出版され、翌月にはテレビ朝日でドラマ「ROOTS」が八日間連続放送される。一二月には、アレックス・ヘイリーが来日。全国で講演会やサイン会を実施、翌年の一九七八（昭和五三）年の四月五日には、テレビ朝日「水曜スペシャル」で「ルーツ」特番、九日より、連続八日間ドラマ版の再放送が行われ、一日には文庫版が発売されている。

小島信夫が『文体』で「ルーツ 前書(一)」というタイトルで連載を開始したのが「ルーツ」日本語版が刊行されたのと同じ月であり、「ルーツ 前書(五)」の掲載は、さきのテレビドラマの再放送の翌月のことであることから、このブームを意識しながら連載

を書き続けていることは間違いないだろう。

アーサーの『ルーツ』とは、アレックス・ヘイリーが自らの血脈を追求してゆくことで、アメリカの差別社会の様相が逆照射されるという自伝的性質をもつ歴史小説である。やや、長い引用になるが、以下の新聞記事の紹介が分かりやすい。

一七五〇年、西アフリカ・ガンビア沿岸の奥地にあるジュフレの村で男の子が生まれ、クインタ・キンテと名付けられた。村の慣習に従って厳しく育てられ、十七歳になったある日、ひとりで森に出かけたクインタは白人の奴隷商人に捉えられ、長い船旅の末アメリカに運ばれる。バージニアの農場に買われるが何回も脱走し、四回目につかまった時は片足の甲を半分切断されてしまう。治療してくれた医師に買い取られ、何年かあとそこに働いていた奴隷ベルと結婚して娘キジーをもうける。

成長したキジーは若い奴隷の逃亡を助け、そのためノースカロライナ州カズウェルの農場に売られ、主人に犯されて混血のジョージを産む。長じて女奴隷と結ばれ、トムなど八人の子供が生まれる。トムはかじ職の技術を身につける。やがて主人が没落、トムはアマランス郡にある別の農場に売られ、そこで黒人とインディアン<sup>①</sup>の混血娘と結婚する。

南北戦争が起こり、奴隷が解放されるとトムはテネシー州ヘニングに移住し、娘シンシアなどの子供を得る。シンシアは大学まで進み、そこで知り合ったサイモン・アレクサンダー・サイモンと結婚する二人の間にアレックス・ヘイリーが生まれる。

『読売新聞』夕刊 一九七七（昭和五二）年三月二五日  
正確にはサイモン・アレクサンダー・サイモンではなく、ウィル・バーマーと結婚し、その二人の間に生まれた子供、バーサがサイモン・ヘイリーと結婚する。この物語が時系列に小説の形式で語られ、物語終盤に書き手（語り手）であるアレックス・ヘイリーがそれまでの経緯を調べたいきさつを述べる。

この物語がアメリカで大きな反響を呼んだのは、同国が否定しがたい差別の歴史を有しているからであり、物語がノン・フィクションとして受容されていたからだ。故に物語の真実性は事実性に直結し、「ルーツ」論争は、場合によっては物語の価値そのものを揺るがしかねなかった。

米誌タイムなどのベストセラー紹介欄は「ルーツ」をノン・フィクションとして扱っている。ヘイリー氏自身は『ルーツ』はファクト（事実）をつづったものではない。事実をもとにフィクションで彩った「ファクション」だ」と語っている。だが、自分の「根」をアメリカ建国二〇〇年の昔、ガンビアの奴隷商人の手にかかった少年に見出す——という「事実」がこの小説を支えていることも確か。この根底がフィクションなら「ただの奴隷物語となりかねない」（サンデー・タイムズ誌）。

『朝日新聞』朝刊 一九七七（昭和五二）年四月一日  
こうした「ルーツ」の信憑性への疑義に対し、田中一光と署名された『朝日新聞』の記事は以下のように呼応している。

こう見えてくると、ノンフィクションの要素が現代小説に入ってくるのは当たり前であり、「ルーツ」が事実と虚構と

を織りまぜたからといって大騒ぎするには及ばないとの結論になりそう。事実この十一日、権威ある全米優良図書委員会はこの作に特別優良図書賞を贈ることをきめた。その受賞理由に曰く「歴史や他の分野を乗り越えた極めて文学的な価値を持っている」と。

だが、そうとばかり言い切れないと判断するのは大岡昇平氏。事実と虚構との関係についてはひときわ厳しい目を光らせる人だけに「フィクションだから事実には多少の疑問があつてもいいという説はとらない。事実によりかかっているのに、その根幹が崩れてしまえば作品としてやはりおかしい。あの小説で一番感動的なのは、事実の重さなのだから」という。一見簡単なように思える「ルーツ」論争は、こうなると歴史小説の問題にも似て、一筋縄ではゆかぬ様相を呈してきた。とんだ旋風が舞い込んだものである。

『朝日新聞』朝刊 一九七七（昭和五二）年四月一六日  
ここで注意すべきことは二点ある。一つは、大岡昇平などによる純文学的立場からの反論はあるものの、訳者である安岡らにとっては、論争そのものが、フィクション性という技巧的な問題に過ぎないと考えられていること。もう一つが、訳者の安岡章太郎自身が「ルーツ」の影響下においてある小説を執筆中であったということだ。

## 二 「ルーツ」前書」のもう一つのルーツ

この安岡の小説とは、一九七七（昭和五二）年三月（連載終了

は一九八二（昭和五七）年四月）に『新潮』で掲載された「流離譚」である。流離譚の単行本は、上下巻で新潮社より一九八一（昭和五六）年に刊行されている。

父母の家がともに土佐の郷土でありながら親戚に一軒だけ東北弁の家があることが気になりだした「私」は、残された日記、書簡、系図や歴史書、さらには実地踏査もまじえ、維新前後の激動期に生きた安岡家の先祖の歴史に分け入って行き、そもそも故郷の山北村には本家含め安岡四家があり、その基を築いたのが安岡広助であることを知る。

その三人の孫の一人である嘉助は、武市半平太率いる土佐勤王党に属し、参政吉田東洋を暗殺。天誅組に加わり逆賊として京都で処刑。覚之助は、勤王党の一味として入牢、後釈放され、戊辰戦争で官軍の将として戦い、会津で戦死。道之助は民権運動に参加し若くして病死。こうした物語に加え、福島梁川で医館を開業した本家の安岡正熙らの逸話や、行方不明だった文助の墓の発見に至る経緯、病床の正熙が「私」の伯父に送った望郷の念切々たる書簡の引用などにより構成される、歴史（探究）ロマンである。

多くのルーツ（祖先）たちの人生が維新前後の激動の時代と重なる様を「流離」の物語として描く点に、アーサーの「ルーツ」の影響が伺える。この小説は、昭和五七（一九八二）年に第四回「三大新潮賞 日本文学大賞」受賞を受賞し、中期の安岡の代表作の一つとなった。

この「流離譚」は、「A View by the Sea」という表題とロビンピア大学出版部から刊行された英訳短編集に「悪い仲間」「海

辺の光景」などの初期の代表作と並び収録されている。この英訳短編集に関して書かれている注目すべき言説がある。

訳者はカレン・ウイゲン・ルイスで、巻頭に安岡章太郎の人を丁寧な解説した序文を掲載している。

この中で、アレックス・ヘイリーの「ルーツ」と安岡の「流離譚」とを比較している。ヘイリーの大冊の訳者が安岡であるばかりでなく、二人とも自分の祖先の源流をたどっているからである。

今回の英訳短編集を、このルーツ探しと関連させて読むことをすすめる日本文学研究者がいる。「第三の新人論——吉行淳之介・遠藤周作・安岡章太郎」でコロンビア大学から博士号を授与されたヴァン・C・ゲッセルがその一人だ。

(中略)

この主題を支える技法として、私小説の一人称の語りを評価しているのは注目されよう。

『日本経済新聞』夕刊 一九八五(昭和六三)年七月三〇日 自己探究している姿がそのまま表出されることを「私小説」の手法を重ねて考えるヴァン・C・ゲッセルの批評には、一定の留保が必要であるとは思われるが、「第三の新人」の文脈から、フィクションの問題を捉えようとしたことと、「悪い仲間」や「海辺の光景」に匹敵するものとして「流離譚」を捉えた点は注目してよいだろう。

ところで、さきに日本における「ルーツ」受容には、特定のテクスト間のものに加えてもう一種類あると指摘したが、それは「ルーツ」の受容に関する問題系と接続する。

朝日新聞データベース「聞蔵Ⅱ」の検索結果では、一九七六年以前に「ルーツ」という語彙はほぼ見られない。例えば、一九六七年の検索結果は三件、それも「フルーツ」という語彙の一部としてである。

ところが刊行後の一九七七年以後には「ルーツ」という語はまさに湧き出るように散見されるのだ。以下、該当記事を列挙する(「ルーツ」はルーツと表記し、副題の前に「」を挿入)。

①「ひいじいさんは日本人——ルーツ 捜すマルカーノ選手」(三月二十四日) ②「比国の山の中に黒い民族 ピグミーそっくりのネグリト族——血液調べルーツ 究明中」(四月二七日) ③「ルーツをたどる福田首相——ロンドン会議から」(五月七日) ④「わが家のルーツは——家系図づくり静かなブーム」(六月一日) ⑤「広がるルーツ 熱——「板橋」ついに解明」(六月二十四日) ⑥「ふるさとルーツ・ブーム——博物館・民俗資料館など続々 7年で3割増」(七月二八日) ⑦「犀星の実母に新説——長女の朝子さん ルーツ 捜し はがきに「山崎千賀」」(八月六日) ⑧「名門だったカーター家——英国でルーツ 探し カーター大統領」(八月二一日) ⑨「エビ天」のルーツはここだった——雄大なインド養殖 水田育ち 満月の夜に漁」(九月一日) ⑩「うどん・そばのルーツ——韓国の旅レポート 麵研究家の小島さん」(九月二〇日) ⑪「機械装置のルーツ——研究ノート」(一〇月四日) ⑫「佃の氏子 ルーツ」の大阪訪問——有志48人、記念に額を奉納」(一〇月八日) ⑬「下町そっくり 佃住吉講 大阪の

「ルーツ」に奉額（一〇月一〇日）<sup>⑭</sup>（広告）貯蓄増強中央委員会 あすは「貯蓄の日」——異色たいだん たくわえの「ルーツ」（二〇月一六日）<sup>⑮</sup>「ルーツ」の作者が来月の下旬に来日」（二〇月一八日）<sup>⑯</sup>「百数十人のメモ押収——暴かれた大麻汚染の「ルーツ」（一〇月二〇日）<sup>⑰</sup>「電話の「ルーツ」（二〇月二四日）<sup>⑱</sup>「東サモアの大酋長——「ルーツ」は山口県だった」（二〇月三二日）

直接的にアーサーの「ルーツ」にふれた記事は、これらの記事の三倍程度にのぼる。ここに抽出したのは、それ以外の記事である。注目したいのは、ルーツに「根源」という意味が付与されて使われるようになったこととアーサーの「ルーツ」のブームには関連性があるということ。さらに、①②③④⑤⑥⑩⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱に、アーサーの書籍は、多くの人々に自らの「ルーツ」を探究させるブームを呼び起こしたことだ。

確かに、アメリカにおいても物語「ルーツ」の「感動」は、単なる一個人の「ルーツ」が壮大な歴史の物語に接続し、その事が自分自身の固有性と偶然性を保証するところにある。沢山の人々の人生が自らの人生に繋がっているという実感と置き換えてもいいだろう。

安岡章太郎の「流離譚」は、その意味でアーサーの「ルーツ」の系譜にあるものとして受容されたと考えて間違いないだろうし、その様なものとして書かれた。安岡は言う。

「流離譚」はじつに幸運な作品であった。私自身の血縁を遡って、主に幕末維新史に係はりのある部分を事実在即して書きとめたものだが、書きだすまでは何が書けるか少しもわから

なかった。それが書き進めるにつれて、都合のいい時機に都合のいい資料があらはれ、殆どひとりでに小説らしいものが出来上った。

『新潮』第79巻第7号一九八二（昭和五七）年七月これに呼応するかのよう、小林秀雄は「流離譚」を以下のよう

に読む。  
資料との、争ひと言つてい、やうな緊張した対話を、紙上で、あからさまに続けて行く作者の意識が、おのづからこの長編を貫く強いリズムの形成し、それが読者の心を捕へるのを感じるからである。こゝら辺りに、この作家が開拓した歴史小説の手法があると見てもよいのではないか。

『新潮』第79巻1号 一九八二（昭和五七）年一月ここで「流離譚」における資料と文学の間にある新奇性を「リズム」という文学的な問題（リズムとそれに伴う感動）に収斂させて捉えようとする小林の見方は、結果的に大衆的なアーサーの受容と重なってしまう。

わが家のルーツ（根っこ）は——家系図づくりがいま、静かな人気。昨年夏から本格的な「ルーツ探し業」へと手を広げた日本家系協会（東京都中央区銀座三ノ八ノ四新聞会館内）には一年ほどの間に三百件を超す注文が舞い込んだ。（中略）家系図づくりはルーツ上陸とともに熱っぽさを増す気配も。

さきに列挙した④に相当するこの記事では、日本における「ルーツ」ブームの本質が「ルーツ探し」ブームであったことをよく示している。他の記事でも多くの「ルーツ調査会社」が紹介され、「しろうとでも五代前までは」調査可能であったりすることが紹



介されている（六月二十四日）。また、同日の東京都板橋区の郷土史家のグループが取り組んだ「ルーツ探し」を紹介する記事では、以下の様に述べ、「ルーツ」という語そのものの定着ぶりにふれていることが注目される。

アメリカから上陸したルーツブーム——。「ルーツ」という言葉がはやくも日常語になった感さえある。ただ、民族の根源を探究するアメリカ版に較べ、こちらのは単なる「先祖探し」と言ったおもむきが強い。

### 三 「ルーツ」ブームの二面性

こうした調査の苦勞の末に人々が得たものとは何だったのか。「新たな親戚関係の誕生」（六月一日）、「華麗なるルーツ」（九月七日）、「精神性」（八月二三日）などという言葉からは、強い自己肯定感が伺える。「ルーツ」探しに誘う業者やそれを受容する人々には、自らが「感動」したり「意義」を見出したりするために「ルーツ」を調査するという、顛倒した目的が措定されている。「ルーツ」の何に注目するのかは自由であるのだから、自らが見出したいと思う「ルーツ」に出逢うまでその「旅」は続くのである。それも、「青い鳥」は意外と身近に見つけることが出来る……。

アーサー・ヘイリーが来日した際、安岡章太郎、緑川亨というブームの火付け役たちによる座談会が『世界』378号（一九七八（昭和五三）年二月）に開催されている。

日本の中で差別をなくしていく、差別の構造からの解放を

獲得してゆく運動の中にみられる問題意識と、黒人解放運動の中でアイデンティティを追ってゆく意識との間には共通したものがあるような気もするのです。『ルーツ』がアメリカで読まれているとはどういうことなのか、また、白人がそれを読んだときどういう反応をするか、それを知りたいと思うのは、そのためなのです。

こうした緑川の発言は、ブームの発信側としての面目躍如とも言わんばかりに、「ルーツ」受容の正当な「意義」を主張しているわけだが、必ずしもこういった受容に批判がなかったわけではない。

けれど日本の場合、アメリカで話題になったから、ただ一緒に騒いでいるような感があります。日本でアメリカのように「ルーツ」が話題になるなら、もともと日本の古典が話題になるような気がします。今、日本で起こっているルーツ旋風は、ただ表面を吹いている「空っ風」のように思われます。

（東京都・中野区）

『読売新聞』朝刊 一九七七（昭和五二）年六月二九日もちろん、こうした批判が少なからず存在していたことをもって、過去のブームを相対化することは単なる後の世代の特権に過ぎないという誹りを免れないだろう。むしろ、このブームの特質は、発信する文学側と受容する大衆側の間の相互には一定の了解が成り立っていることにある。

文学がある言葉とともに行為を肯定的な形で可視化し、それを大衆が実践するというのは、まさに大衆文化の理想的な形であるからだ。さらに言えば、アーサーの「ルーツ」がもつ政治的な問

題は、日本のそれではない。この事は当然ながら、安定した位置から「ルーツ」を受容することを可能にしただろう。

刊行元の社会思想社は、『ルーツ』と私：Alex Haley in Japan』(一九七八(昭和五三)年三月)という書籍の中で、こうした「正当」な受容をも批判の対象にしている。

『ルーツ』が日本でブームになったのは、アメリカで大評判になったからにすぎない。そして、日本のインテリたちは日本国内の民族問題の正面に引きずりだされて嫌な思いをすることがない限りにおいてのみ、黒人問題を関心の対象にしているのだ。

#### 四 「透明化」しない語り手 —— ルーツは起源か結果か

こうした文脈を前提にして小島信夫の「美濃」から何が見えてくるのか。テキストの語りは以下の様に始まる。

しばらく前から、小説家である私に、年譜が必要になってきた。履歴書の場合とおなじで、自分のことは自分がいちばんよく知っている。それだから、といってもいいが、最初は本人である私が、顔をしかめながら書いていた。もちろん作りごととまぜてはいる。といってもそれは愉しみというような性質のものではない。

(9)

語り手は、「私」という一人称を使いながらも「古田」という三人称を併用する。語り手は小説家・古田信次自身でありながらも、自らを客観視しているような身振りをとっているわけであるが、それ自体は、小説の表現技法としては普通のことである。し

かし、このテキストの語り手は、過剰なほどに小説を読者に向けて書いていることを隠そうとはしない。

多くの連載の冒頭では、締め切りが近い状況で前回の反響を振り返りながらも、なかなか「本題」に入らないことの言い訳をしつつ、饒舌に様々な話題へと拡散してゆく。

この形式はテキストを、語り手が回想も交えながらも直接語りかけているような水準(水準①)と、小説の様な形で語られている水準(水準②)と、今(もしくは以前に)読んでいる(いた)資料等が提示される水準(水準③)に大別する。

本来、透明化すべき語り手は、執筆している態度や感情をそのそのまま表出するだけではなく、語っているものが語り手自身と「同じであつてそうではない」という態度を繰り返しとるために、我々は創作フィクションを読まされているのか、事実を提示されているのか、分からなくなる。まさに「信賴出来ない語り手」である。

本来、近代文学が拘つてきた語りの透明化とは、語られる内容の信憑性を上げるためのものであつた。逆に言えば、創作が如何にして事実を包摂しながら、事実性ソリッドネスを確立するかということでもあるだろうし、資料の直接の引用などがもたらす結果も同様の結果を呼び込むことを可能にする。しかし、「美濃」におけるそれは、創作／事実フィクション／ノンフィクションという二項対立そのものを無効化している行為にしか見えない。

一方、アーサーや安岡の語り手が歴史ヒストリーを探究しようとすることを「行為」としているのに対し、「美濃」の語り手は全く異なる「行為」をしている。

私は自分のやるべきことを彼に任せた。私はどんなにホツと



したことだろう。私はすっかり下駄をあずけた気分になった。

篠田賢作の苦勞と愉しみがはじまったといってもいい。私はその頃ふとしたことがきっかけで評伝というものを書きはじめていた関係上、篠田は私にいったようである。

「ぼくはいつか、あなたの評伝を書きますからね」

「ぼくは書かれるほどのことはないよ」

「いいや、きつと書きますよ」私はお茶をにごしてそれ以上はいわなかった。

(9)

このテクストには最初から「小島信夫」という署名が付されているので、「私」という一人称を使う人物が岐阜出身の「小説家」ならば、それが小島であると読者が同定しても不思議ではない。

また、「最近様々な作家の評伝を書いている」という設定も、詳しい読者であれば、『私の作家評伝』が一九七二（昭和四七）年八月と一〇月そして一九七五（昭和五〇）年四月にⅠからⅢ巻の刊行がなされていること、ⅠとⅡに関しては刊行年の芸術選奨文科大臣賞（二三回）を受賞していることが想起され、小島による私小説的な設定であるという理解に至ることは容易である。

また、一九七一（昭和四六）年七月の『小島信夫全集』六巻（講談社）の「あとがき」には全集収録の「詳細な年譜」を作成した「平光氏への感謝の意」が述べられているが、この平光善久（一九二四～一九九）こそが篠田賢作のモデルであると想定されることも自然である。ちなみに、このあと出て来る挿絵画家・平山草太郎も、さきの『私の作家評伝』の挿絵を描いている堀内節太郎とはほぼ同定可能な設定になっている。

一見、アルファベットや偽名の使用は元の人物の確定を避けよ

うとするためのものであるが、故に読者はその確定の欲求かられてしまうという逆説もある。このテクストにおける多くの人物も、多少詳しい読者にとつてみれば、実在する人物達と同定することが可能である。また、初出である『文体』『文藝』、あるいは小島信夫という署名のテクストを読む読者の多くが文学（文壇）の知識が皆無であるという事態も想定しにくいわけで、むしろ近代文学というシステムが、——少なくとも近代文学を過剰な個人情報保護の文脈を有する現代文学とは一線を画すものだと考えるのだとしたら——こうした人名や地名の匿名性を可視化させてしまふ暴力的なベクトルを常に有していることを逆照射している。さきの安岡やアーサーらの対談に以下の様な発言がある。

緑川 さきほど日本の差別の問題として、日本に住んでいる

朝鮮人の問題、そして被差別部落の人々の話が出ました。その朝鮮人の場合、朝鮮人は日本の植民地支配の中で創氏改正といつて、名前を奪われ、日本式の名前にかえさせられるということがありました。ちょうど「サム」とか「ジョージ」という名前を黒人につけるように。

アーサーや安岡にとつて、名前の変更が権力の行使による固有性の剥奪であるならば、『美濃』における名前の変更とは、こうした文脈とは全く異なる意味をもつ。偽名は、より一層モデルとなった人物確定の欲望を喚起しフィクションの中でより強い現実性を喚起させてしまうのだから。

語り手と篠田賢作との関係は、評伝を書かれる／書くものという関係であるが、結果全ての資料は篠田の元に集まることになる。評伝を書く時に「事実」が書かれる者の周囲を傷つけてしまうこ

とがあるように、篠田賢作の資料には古田が忘れてしまったもの、思い出したくはないものも含まれる。だが、評伝の書き手でもある語り手は、そのことも踏まえた上で、自らの評伝を書くことをあきらめ、賢作にその「愉しみ」と「苦しみ」を委ねているのである。

一方、大部の評伝を書き終えた語り手は、作家が晩年にすべき仕事として、自伝的な小説を書くことを考えている。そのためにしばしば、岐阜（美濃）に帰郷するわけだが、その帰郷も全て賢作にとって重要な「資料」であり、賢作の知るところとならなくてはいいない。

帰郷時の行動の全てをとにする賢作は、語り手にとって自伝的小説の資料の総体である。その意識が、「賢作とは美濃（岐阜）」であるといった認識と繋がっているのである。

アサーや安岡の語り手は、探究の情熱（物語）が徐々にそのルーツを明らかにしてゆく。同様に、語り手と篠田賢作は美濃を歩き、美濃を調べ美濃に詳しくなつてゆく。しかし、その探究が美濃というルーツの総体を浮かび上がらせない。語り手と賢作の資料や見解は、時には食い違い、さらに美濃に係わる多くの他者が異なる資料解釈を提示してゆく。他者の評伝と異なり、自伝的小説は決して完成することがなく、ルーツに辿りつくこともないが、その過程は結果（物語）になつてゆく。物語は、ルーツの可能性を語るのみであり、感動を呼ぶルーツなど期待すべくもない。

## 五 「ルーツ」と「立身出世」——解体されるアフォーダンス

語り手は、この両者の関係を「夫婦」など様々な形の比喩として描く。また、そこには東京／美濃という関係が重なり、両者を「立身出世」というキーワードが媒介することにより、二つの固有の土地の関係は都会／田舎、中心／周縁などの様に一気に抽象化される。東京と美濃、篠田と古田。平山と古田、語り手と読者、外部に存在する実際の連載と、テキスト内に存在する連載の評価、反響。これらは、全て互いを不可欠なものとした反転可能な関係である。

あなたは、これから郷里である岐阜においての行動は、私にかくれてなさるべきではない。もしそこであなたが、将来（篠田）がつんば棧敷におかれていたとしたら、みつともないことになる。何故かという郷里は、私が行動し、彼が認知するというこのひそかな世界においては、私と彼の二人のものだからだ。

(10)

この独特の語り方は、しばしば読者を混乱に陥れる。カギ括弧を使用しないテキストにおける「私」「あなた」「自分」という代名詞は、しばしば小説家・古田と重なりつつ、離れてもいる。また、引用した二つ目の「私」に（篠田）という括弧書きが加えられていることは、語り手にとってこの読者の混乱が前もって想定しつつ書かれていることを示している。

たとえば、引用に続く二段落目の「もし郷里についてそうなら

ば（中略）私自身が、彼、篠田に報告するようにすべきだ。本気になって……」と述べられる語り手自身の認識は、前の段落の「それからあなたに関する資料は誰よりも私が一番沢山もつようにならなくてはならない。一等資料は私に提示すべきである。」に対応しているわけだから、後者の「あなた」は篠田が語り手に呼びかけている二人称ということになる。だとすると、その一文前の「あなたが自分の口からそういったということを、私にほめかしておいてもらいたい」における「あなた」や「自分」そして「私」も全て語り手であるという意味で「あなたが自分の口からそういった」という部分をカギ括弧で括つてみるような理解が必要であることがわかる。

「彼の短かい言葉」の「彼」とは篠田のことであろうが、さきに述べたように、この両者の関係は、単なる年譜を書かれる／書くという関係ではない。書かれる対象にとつて、作家とは「晩年に」は「自伝」を書くべきものであり、その結果「郷里」はその作家を認め、郷里の文化振興としての「文学碑」や「博物館」へと繋がるという認識がある。そのことを「立身出世」と呼ぶ語り手の認識は、アイロニーではない。

傑作を書くのを、どうして恥かしがるのか。それならいったい何のために文学を書くのか。涙の出るほどの問題なのだ。

あなたは、このような人間であるべきではないだろうか。そのとき、郷里在住の彼のつづる年譜というものは、迫力をもつことになり、（そうになったら、どうして年譜のみにとどめておけようか）評伝も意味をもつことになる。そうなれば彼は、東京の中央文壇に対して鼻をあかしてやることが出来る

し、いくぶんかは郷里に対してもそうである。（12）

「あなたは、このような人間であるべきではないだろうか。」とは、篠田側からの語りかけであり、（そうになったらどうして年譜のみにとどめておけようか）という判断は語り手によるもの、最後の「彼」とは我々に向かう語り手側から篠田賢作に対する三人称であり、結果、価値のある文学が価値のある自伝を生み出し、それが作家の故郷在住の者による「年譜」を媒介として、優れた「評伝」を生み出し、故郷及び中央のどちらにも錦を飾ることが出来るというのである。

私は自分の家にある自分の書いたものの印刷物のうち、篠田がどんなにその気になって広告をしらべていても眼につかぬものだけをダンボール箱の中に放りこんでしまっていた。それさえも彼が入手している可能性があると思うものもないことはない。私には彼の姿がうかんできく。私がダンボール箱の中に入れずに捨ててしまい、彼が広告を見おとしているというようなことを、私が郷里の彼の家の書齋で見出すときに、もちろん年譜をまじえてではあるが、デリケートな雰囲気がある、二人の間に生じてくる。（18）

こういった両者の「デリケートな雰囲気」は、「大工（建築家）」「農夫」「教師」「役人」「中国の高官」とあらゆる例で考えても同じことが起こる普遍的な問題であることを語り手は主張する。確かに、建築、農作業、教育、行政あらゆるものは、するもの／される（生み出される）ものとの二者関係で出来ている。こうした関係を「相手」が「遊び」であるという語り手の比喩には、ある傾向が見出される。それは、「相手」という言葉が「自分」と

同時発生的であること、同様に「遊び」が「仕事」と裏表の関係であることだ。こうした反転可能性は、文体においても主題においても、「美濃」のあるいは小島のテクスト全体の特質であるといってもよい。描くもの／描かれるもの、ルーツとしての故郷、故郷としてのルーツ、文章のイメージをより豊かにする挿絵／挿絵をより豊かにする文章……、小島のテクストは、多くのアフワードする／されるといふ二者関係を無効化してゆく。

## 六 モンマルトルな「美濃」——ホモソーシャルという抵抗

先に、語り手は、篠田賢作との関係に「夫婦」というの比喩を多様することにした。

私はもう長い間、郷里の岐阜へ行くと、先ず篠田賢作に連絡する。それからかならず彼の家の書斎かその隣りの部屋に泊る。宿の契約を何年も前からしており、これからも永久に契約したようなものである。二日のうちの一日をよんどころなく別のところに、たとえば旅館に泊るとしても、あまり望ましいことではない。私は私の父と出身地を同じうする画家の平山草太郎に私の評伝のさし絵をかいてもらっている。(21)

ここからのエピソードは、故郷における篠田賢作と語り手の「夫婦」的な関係を説明するようなものでありながら、そこから唯一の「浮気」(岐阜在住の際に篠田の家に泊まらなかったこと)として登場してくることになる平山草太郎との関係を語る。さきに指摘したように、両者の「さし絵画家」／「作家」という関係も、これまで話題の中心にあった「評伝」という問題を媒介に浮

上してくる。もちろん平山のモデルもこれまでと同様に、坪内節太郎(一九〇五―一九七九)であることがすぐに想定される。当時、小島の評伝の挿絵は全て坪内が担当していたからだ。評伝に掲載される多くの挿絵は、単なる「イラストレーション」という一時的かつ主従的な説明などではない。

また、語り手はこの「浮気」の際に、篠田から言われた「ほんなら、ええわ」という言葉の「郷里のひびき」に拘る。それは、語り手が以前に書いた「郷里の言葉」(一九六二年一月『新潮』に同文を小島信夫が掲載)に関するエピソードを引き出し、以下の様な思いに至る。

私や篠田は、でき得べくんばなるべく郷里の言葉をつかって会話をすべきであり、それをつかって偉大なる自叙伝を書き、悪い意味ではなく、「夜明け前」がそうであるように郷土を顕彰すべきだ。

(26)

このテクストの話題は、記録しようとするものや記録されるもの、中央(東京)と地方(故郷・美濃)をめぐる問題でありながら、常に年譜や評伝といった文学や言葉の問題である。そしてそれらは、いわゆる想起的(前もって設定された構造・計画が希薄)な饒舌体で描かれる。だが、こうした行き当たりばったりに見える饒舌体は、様々なレベルで結び付き合いながら、テクストを構築している。テクストは、「そういえば」に代表される比喩的な関連性で先へ先へと繋がりがつつ、さりげなく現れたにすぎなかった文学碑の問題や方言の問題が後に大きな主題として浮上してくることになる。

ここで、安岡らによる、アーサーの翻訳の際の言説に目をむけ

てみると、両者の差は、より明確になる。

「アイ・イズ（一）<sup>56</sup>」などの黒人の会話には、そのふんい気をどう出したらいのか泣かされる」という。いっそ方言は土佐弁でやりますか、なんていう冗談が打ち合わせの席上、高知県出身の安岡さんから飛び出したという。「とにかく平明で美しい文章の作品に」というのが最終目標だ。

『読売新聞』一九七七（昭和五二）年三月二五日アーサーの影響下において、「流離譚」を書いていたこと、その物語が土佐の人々の土佐の言葉の物語であることを思い起こせば、両者の違いは明確だ。異なった言葉を有するものに如何に伝えるかに拘る安岡と、同じ言葉を理解するもの同士にしか分からない感覚に拘る小島。これは、翻訳可能性への信／不信の問題であつたと言つてもよいだろうし、いわゆる歴史的記述の真実性に対する信／不信であつたとも言える。

さらに、テキストは「ルーツ」＝前書／「美濃」＝本編という関係も、実は内破している。「前書」で展開される古田、篠田、平山などの関係は、多くの場合その妻をも巻き込んだ、複数の夫婦関係でなされているが、「美濃」では夫婦関係には至らない女、あるいは結婚制度の外側におかれた女（古田の姉）を媒介にしてなされる。結果、「美濃」で描かれる人間関係は、血の物語ではなく、実は古田をめぐる（あるいは古田と賢作という関係性）をめぐる、男たちの覇権争いなのである。それは、事前に探究の目的として想定されていたルーツのようなものではなく、物語が浮かび上がらせる結果そのものである。

「ルーツ前書」は(3)に至り主要な人間関係をほぼ明示し「モン

マルトルの丘」に至る。唯一『文藝』に掲載された「モンマルトルの丘」の執筆は、偶然であつたかもしれないが、独立＝完結したものであると同時に、同じ意識の元に生み出されたテキストではある。(4)の冒頭で語り手は、すぐにこの物語を一連の流れに組み込むことを読者に要求しているのは、そのことをよく示している。

全体の殆どが執筆中の意識に基づいた独白であり、物語内容は岐阜出身の古田という作家が、古田という若い詩人を激励するために、丘をのぼり、その丘を若い詩人が「モンマルトルの丘」であると評するだけである。

長良川と木曽川に囲まれた輪中地域の岐阜中心部は、右手に一〇〇～三〇〇メートル程度の山を有し、山中の寺から街へ続く道は当時の歓楽街に至る。二人がのぼった丘とは、ここを指すのだろうが、それは川に囲まれて複数の寺院を有しながらも、沢山の文化人を排出したモンマルトルの丘そのものだ。

「モンマルトルの丘」も「美濃」の他の章も、全ては、美濃の文化人たちの交遊録であり、物語において「美濃」とは彼らそのものである。テキストは繰り返す、美濃はある特定の地域の謂いではない、普遍的な何かであると。これは、「美濃」全体のテーマであると同時に、そのテーマを最も象徴的に示した章が「モンマルトルの丘」であるのだ。

ただし、「モンマルトルの丘」は美濃をめぐる男同士の物語でもあり、一方で歓楽街に抜ける展開はヘトロセクシナルな物語でもある。独白で語られる岐阜の作家森田草平は、煤煙事件の森田であり漱石の弟子（批評家）でもある森田である。独白で語られる

古田（≠小島）の初期小説は、ヘトロセクシャルな物語であると同時に、学生同士のホモセクシャルの物語でもある。

また、「モンマルトルの丘」は、繰り返し洪水の被害と闘わざるを得なかった美濃の人々の歴史や輪中根性の調査と考察を小説にしようとしている作家が、同郷の批評家（篠田一士）からその情報を聞きつけた新聞記者から記事を新聞に依頼されたといういきさつそのものが、小説になったという何重にも入れ子状になったテキストである。そして、それ自体は、様々な形で美濃を語っていないながら、美濃それ自体は、空虚な存在のままである。

同時代の「ルーツ」という言葉に拘りつつ「美濃」を読むことは、小島の同時代言説への抵抗を読むことでもある。

# 【註】

テキストの引用は、講談社文藝文庫版『美濃』（二〇〇九年一月）に依った。引用の末尾の（ ）は、引用元の頁数を示している。

（ひきた まさあき 東京学芸大学教育学部准教授）